

モーツァルトの断片 ~その1~
『モーツァルトにおける未完成と完成 断片の魅力』の報告
クラリネット五重奏曲のためのロンド楽章 イ長調 K.581a 及びナント草稿^{スケッチ}について
(神戸モーツァルト研究会 第208回例会)

野口秀夫

2009年5月23日(土)に東京 Hakuju Hall で日本モーツァルト研究所設立10周年特別企画として、『モーツァルトにおける未完成と完成 断片の魅力』と題したラウンドテーブルとレクチャー・コンサートが行われた。ラウンドテーブルにはパネリストとして海外からヴェルツ大学教授のウルリヒ・コンラート氏、ザルツブルク国際モーツァルテウム財団学術部長のウルリヒ・ライジンガー氏、ハーバート大学教授のロバート・レヴィン氏、国内からはくらしき作陽音楽大学音楽学部准教授の森泰彦氏、慶応義塾大学准教授の西川尚生氏が参加し、コーディネータを日本モーツァルト研究所所長の海老澤敏氏が務めた。先ず報告から始めたい。

1. ラウンドテーブル発表

森泰彦氏は『フラグメントとしての「作品」』と題し、逆説的に「完成された作品とは？」という問いを投げかけた。18世紀の作曲家はオペラのナンバーを入れ替えたり、既成の楽曲から楽章を抜き出したり他の作品に流用したりした。こうしたやり方は「生活の知恵」であるとともに17世紀後半以降のきわめて合理的な思考法の反映でもあったろう。したがって今日「1音として無駄はなく完璧」とされているようなバッハやモーツァルトの作品でさえ、作曲家が存命であったなら大掛かりな改訂や楽章の入れ替えをこうむった可能性が大いにあり、われわれは作曲家が世を去った時点で残された「最終稿」を持っているに過ぎない。具体的にはモーツァルトが1783年3月23日にウィーンで開いた最初の演奏会では12曲のプログラムのうちリサイクル曲が5曲、即興曲が3曲である。つまり作曲者が生きている限り作品は未完成なのではないか。さらには演奏されなければ完成しないとも言える(行為することが音楽作品である)。ということはモーツァルトの作品(楽譜)はすべてフラグメントだということになる。演奏されてやっと完成だが、そのとき曲は死んでしまったとも言えるのではないかと結んだ。

ウルリヒ・コンラート氏は『モーツァルトの創作の仕方、とりわけスケッチと断片についての所見』と題してモーツァルトの創作の段階を、具体的な作品の構想に意識を集中し、構想の実現を図るべく想像力が活動を開始する「アイデア」の段階、音楽的実態を楽譜に定着させる「スケッチ」の段階、推敲された主要声部の手稿スコアを作成する「作曲」の段階、草案譜に重要でないところを追記し、きちんと楽譜へ仕上げる「書く」段階の4ステップに分類して説明した。は自分のためのスケッチであり、われわれには何のスケッチか分からないものも多く、旋律だけの「景観スケッチ」、部分のみを抜き出した「断片スケッチ」など難しさの解決がスケッチの目的であった(プラハ交響曲の第1楽章のスケッチにおいてモーツァルトは表にテーマを書いたが気に入らず、裏に2つのテーマを書くが、その2つめのテーマの前半が気に食わずまた表に戻って展開している。これらの部分部分を順不同でピックアップしてモーツァルトは各声部に使用している)。モーツァルトは「作曲する」といい、「書く」と言っている。以上から、フラグメントとは作曲段階は終わっているが書きかけの作品ということができる。

西川尚生氏は『モーツァルトの断片作品とM. シュタードラー』と題し、モーツァルト

が未完の断片として遺した作品群を重視し、それらの目録を作成しただけでなく、いくつかの作品を補筆して演奏可能な形に仕上げたシュタードラーの補筆作業の背景と、当該作品の受容において果たした役割について発表した。コンスタンツェから協力を求められ fragments 目録を作成し、ブライトコプフとの交渉やニッセンのモーツァルト伝にも使われたが、本人は「作品が未完成なのは残念だ」と言っているように単なる金儲けのためとは決め付けられない。シュタードラーの補筆作業には、モーツァルトの原曲を保持して足りないところを加えたもの、関係のない曲をつなげた (K.442) 楽器編成をピアノ独奏に変更した (K.396, K.576) ジャンルを変えた (K.323, K.322, K.196a) がある。かつては「シュタードラーの補筆はモーツァルトの音符以外が含まれているとは誰も気がつかないであろう (モザー)」と評価が高かったが、最近では「単純で稚拙。再現部が提示部と同じで配慮が感じられない。現代であればモーツァルトの研究が進んでいるゆえ作曲年代を考慮した補筆が可能」という理由から低く評価されるようになった。シュタードラーはレクイエム K.626 のドミネイエズとホスティアスの補筆にも参加したとクリストフ・ヴォルフにより言われてきたが、最近そのシュタードラーの手稿譜の年代が 1830 年頃と分かり除外されるに至っている。現状シュタードラーによる補筆作品は K.322, K.323, K.196a(補作未完), K.186i(ロイター曲), K.429, K.348, K.442, K.443, K.372, K.396, K.402, K.403, K.400, K.355, K.401, 2 台のクラヴィーアのためのラルゲットとアレグロ 変ホ長調 K.deest, 弦楽四重奏のためのフーガ 八短調 (バッハのフーガ 変口短調 < 平均率クラヴィーア曲集第 2 巻? のモーツァルトによる編曲) の 17 曲とされる。

ウルリヒ・ライジンガー氏は『最近発見されたモーツァルトの自筆譜 < ナント ^{スケッチ} 草稿 >』と題して発表した。「ナントの草稿」とは実際どういうものなのか：今や Nantes/Mozart で Google 検索すると 25 万件はヒットする。2 曲ともメモである。その作品は知られていないためその作品についての唯一のメモである。モーツァルトの記譜法からソプラノ記号で二短調作品であることが分かり、声楽作品ということも符尾から分かる。第 1 曲は断片でなく終止線のある景観スケッチであり、曲全体がスケッチされている、完成されたメロディ草稿であり、オペラアリア以外の草稿としては珍しい。第 2 曲は断片であり、オーケストラ伴奏付きの声楽曲である。冒頭は器楽の表記でありおそらくヴァイオリンが使われる。第 1 曲目は読めるが、第 2 曲は自分のためのメモゆえ専門家でも読み解けないところが今だにある。第 2 曲にはクレドとあるので第 1 曲はキリエであろう。歌詞を付けることができる。演奏すればレクイエムのキリエより長くなる(?)。それが本当にモーツァルトによるものかということ、私たちはどのように知ったのか、そしてそれが本物であるのをどのように証明できるのか：フックスによるモーツァルトの筆跡とのお墨付きが下部にある。フックスはモーツァルトの筆跡を知っていたので信用できる。フックスは競売の仕事もしていた。6 万マルク位 (今なら 1500 万円 ~ 3000 万円位) の値段が裏面に書いてある [裏面には鉛筆で 665 との数字が書いてあるがこのことなのだろうか] 本物である証拠はまだないが、モーツァルトの自筆と非常によく一致していることは確かだ。それはモーツァルトの創作活動の中でどのような位置にあるのか：用紙から 1787 年 ~ 1791 年の間に書かれたものと分かる。タイソンの研究によれば 1787 年頃から教会音楽に興味を持ってチャンスを狙っていた。ヘンデルのオラトリオの影響も見られる (クレド冒頭の器楽部分)。このスケッチを補完して、演奏可能な作品にすることができるのか：Yes であり No でもある。クレドはオーケストラと合唱が出てくるが形式の想像はできない。キリエは歌詞は付けることができ、曲の終わりまで演奏できる。和声を付けることも勿論できる。しか

し、半音進行が多いこと、減和音が多いことから曲の始まりから書かれていない可能性もあり（バスやほかの声部があれば分かるのだが）。また初めから終わりまであったとしても曲が分かるわけではない。和声にもいくつもの案がある。4声の合唱を作りオーケストラの伴奏を付けることはできよう。運がよければモーツァルト的な曲もできよう。しかしそれでモーツァルトの曲ができるわけではない。モーツァルトは草稿と違えた曲をよく作ったのだから。残っている9段の五線譜の上3段は切られてしまっている。それはどこにあるのだろうか。

ロバート・レヴィン氏は『断片の補筆について』と題して自由に語った。われわれの言うフラグメントとはモーツァルトが捨てたものを言うのではない。タイソンが言うようにいくつかの完成曲はその前には10年間フラグメントであった。コンラートの研究でモーツァルトは一番短い時間で一番多くの作品を作るプロフェッショナルであったということが分かった。モーツァルトが作曲して「書き残した」ものは書き上げることができるかもしれない。モーツァルトが長く生きていたらフラグメントは書き上げられ1792年や1793年の作品となっていたであろう。シュタードラーは音楽を売るためにフラグメントを補筆した。レヴィンはモーツァルトの音楽が素晴らしい考えを沢山含んでいてそれを示したいから完成するのだ（モーツァルトよりは劣るのだが）。しかし、どんなことをしても一部は不可能で一部は自殺したいと思うくらいだ。完成曲が落ち入りやすい危険には2種類あり、単純すぎるという危険、素晴らしいことをやりすぎる危険である。再現部で提示をそのまま繰り返すのは、モーツァルトの作品にないことはないが、そのような単純な補作は失敗である。まず、モーツァルトの時代毎の作品に対する理解が不可欠（和声、ハイドンとの違い、テクスチャ、構造など）。メロディのシンメトリとアシンメトリの選択。形式の部分部分の比率をよく知らなくてはならない（モーツァルトも小節数をよく数えている）。しかし性格的なコントラストは期待されるようには続かない。期待されないような作りをしよとすれば何百何千の危険がある。私の補作も大目に見て頂きたい所以である。

2. ラウンドテーブル討議

- レヴィン： ナントの第1曲は途中からであり、別の紙にへ長調からの始まり部分があって、そしてこの紙に繋がっていると思われる。3部形式ではなく、5部形式のキリエであろう。
- コンラート： クレドもコーラスのところは途中ではないか。クレドの歌詞が合わない。またキリエの途中に器楽が挟まれていないのは変である。
- ライジンガー： ずっとコーラスが歌われていくのかは疑問である。またキリエでない可能性もある。
- コンラート： 確かに。ミサの下にコミックオペラのスケッチが存在するシートもある。

3. ラウンドテーブル質疑応答

- 野口： コンスタンツェ用に作曲した作品にあと数音で完成という未完成曲が多いが、他人に演奏されないためにそうしたのであって、コンスタンツェは自ら数音を補って演奏したというような推定は成立しないか。
- コンラート： コンスタンツェにはそのような才能はなかったと思われる。従ってモーツァルトはコンスタンツェが完成できるとは思わなかった筈だ。たとえばモーツァルトの死後未完成曲の完成の依頼の手紙をベートーヴェンに送って断られている位だからである [K.571a Caro mio Druck und Schluck]
- 野口： クラヴィーアと管弦楽のためのコンチェルト・ロンド イ長調 K.386 に関

し、A. アインシュタインの補筆で聴き慣れて来たため、紛失していたモーツァルトオリジナル終結部が発見された 1980 年以降の演奏に未だに違和感を覚える。どうしたらいいものか。

レヴィン：重要な質問だ。慣れたものが本物でないとき、本物に対する反応をどうしたらよいかということである。もし私の補筆に対し本物が出てきたら即座に私の方は捨ててください。

4. レクチャーコンサート プログラム

ヴァイオリン、チェロとピアノのための三重奏曲 K.442 (マルゲール版)
四手のためのピアノ・ソナタ ト長調 K.357 (レヴィン版)
二台のピアノのためのラルゲットとアレグロ 変ホ長調 K.deest (レヴィン版)
二台のピアノのためのフーガ 八短調 K.426
(休憩)
アダージョ ヘ長調 K.580a (バイヤー版、レヴィン版)
クラリネット五重奏曲のためのロンド楽章 イ長調 K.581a
(日本モーツァルト研究所委嘱レヴィン新補筆版)
クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581

クラリネット：四戸世紀
ピアノ：ロバート・レヴィン / 小川京子
ヴァイオリン：篠崎功子 / 城戸喜代
ヴィオラ：百武由紀
チェロ：苅田雅治

5. 神戸モーツァルト研究会テーマ

5.1 クラリネット五重奏曲のためのロンド楽章 イ長調 K.581a

本曲のレヴィン版はもちろん世界初演であって録音はまだないが、既に発売されている他の補筆版などを聴きながら曲を聴いてみたい。

(1) モーツァルトの部分は 1958 年刊行の新全集によれば 89 小節までしか残っておらず、モーツァルトが展開部をどのように進めていくのか判断が付けにくいところで中断していた。オットー・バツハはそれにもかかわらず果敢に補筆を試みている。その後 1990 年頃 Göttweig のベネディクト修道院で続きの 1 フォリオ 21 小節が発見された。ディーター・クレッカーの CD はその 21 小節を使って曲を完成し録音した最初の CD となったが、1994 年にチューリヒのモーツァルト協会機関紙で公にされたこの情報はモーツァルト没後 200 年の熱狂に乗り遅れたため、一般のモーツァルト文献には引用されることなく時を経ていった。今回のプログラム解説でさえ、モーツァルトの部分が 89 小節しか残っていないと誤記している。現在 110 小節が参照可能なのは 2002 年刊行の新全集 X/30/4 Fragment 集あるいは 2007 年刊行の VIII/19/2 管楽五重奏曲校訂報告においてであり、DMA のサイトでファクシミリを含む全容がアクセス可能である (モーツァルトはこれ以上の続きは作曲していないことがファクシミリから分かる)。この 21 小節の発見によりモーツァルトの展開部の方針が見通せるようになり、補筆がやりやすくなった。レヴィンの補筆はそのような状況下で行われた。

- ・オランダ・ソイスツ・アンサンブル(89 小節)
- ・ディヴェルティメント・ザルツブルグ(89 小節+オットー・バツハ補筆)
- ・ディーター・クレッカー、レヒル・ルグ-四重奏団(110 小節+エルンスト・ブッシュマン補筆)

(2) 歌劇《コシ・ファン・トゥッテ》第 24 曲 フェランドのアリアとの類似主題について

Clarinetto
in La/A

譜例 1 K.581a クラリネット独奏冒頭

FERRANDO

(lietissimo)

Ah lo veg - gio, quel - l'a - ni - ma bel - la al mio

pian - to re - si - ster non sà; non è fat - ta per es - ser ru - bel - la a - gli af -

ferr. fet - ti di a - mi - ca pie - tà;

譜例 2 歌劇《コシ・ファン・トゥッテ》第 24 曲 フェランドのアリア冒頭

K.581a の五線紙が Wz100 (1789 年後半に使われ始め、その後の 2 年間によく使われた用紙) であることからコシ・ファン・トゥッテ K.588 と同時期の用紙であることは分かるものの、前後関係は分からない。K.581a の用途としては K.581 との関連、K.622 との関連が指摘されている

(3) 二台のピアノのためのラルゲットとアレグロ 変ホ長調 K.deest の類似音形について

譜例 3 K.581a 第 1 ヴァイオリン 47 小節以降

譜例 4 二台のピアノのためのラルゲットとアレグロ 変ホ長調 K.deest 99 小節以降

この類似は興味深い。経過句あるいはコーダに出てくる音形であって直前の動機 (アレグロの 88 小節以降と K.581a の 23 小節と 41 小節目以降) から導かれているため両者の類似は偶然であると思われるからである。すなわち民謡のようなものからの同時引用は考えられない。レヴィン氏にメロディを口ずさんで質問したところ「それは二台のピアノのためのアレグロにあるね」とは言ったものの「K.581a にはあったっけ」という反応であった。なお、二台のピアノのためのラルゲットとアレグロ 変ホ長調 K.deest は 1781 年の作曲であるとされている。両者ともが未完成であるということにも興味が沸く。

5.2 ナント^{スケッチ}草稿

ラウンドテーブルで解説楽譜が配布された。第 203 回例会の解説と比較すると不明部分が別案で解説されている。ライジンガー氏に解説の根拠を問うたが、おそらく複数の人の解説の結果だからであろう、個別の解説理由の回答は得られなかった。研究会でアップしている楽譜を改訂することの許可を頂いたのでここに改訂版を載せる。

Kyrie in d minor

(Ky - ri - e, Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son. Ky - ri - e, Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son.

son. Ky - ri - e e - lei - son, Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son. Ky - ri - e, Ky - ri - e, e - lei - son, e - lei - son, Ky - ri - e e - lei - son, Ky - ri - e e - lei - son, Chri - ste e - lei - son.

Chri - ste, Chri - ste, Chri - ste, Chri - ste, Chri - ste e - lei - son, e - lei - son.

Ky - ri - e, Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son. Ky - ri - e, Ky - ri - e Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son.

le i -son, Chri - ste, e - lei - son, Chri - ste e - lei - son. [instru - mental?] Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son. Ky - ri - e Ky - ri - e Ky - ri - e e - lei - son, e - lei - son, e - lei - son, e - lei - son.)

Credo in D major

Credo:

Coir:

(Cre - do in u - num De - um.

Pa - trem om - ni - pot - en - tem

Kyrie 校訂報告：

- (1) 配布資料の第 14 小節第 2 音はオクターヴ高い。おそらくミスプリント。
- (2) 配布資料の第 16 小節は付点八分音符、十六分音符、四分音符、二分休符の順となっている。自筆譜が不明瞭のためどちらとも言えないが、歌ってみると研究会案のほうが座りがよい。
- (3) 配布資料のとおり第 23 小節後半と第 24 小節前半が器楽で奏される案を採用した。その場合リタルダンドを置くと演奏がしやすい。

Credo 校訂報告：

- (1) 配布資料では第 7 小節には Credo と書いてあるとの解説。
- (2) 配布資料の第 15 小節は歌唱声部であるとの解説。すなわち八音記号で読んでいるが、そうであると音が外れたように聞こえ、また声楽のメリスマ音形はここには唐突である。研究会案のように器楽譜であるとする冒頭の音形に類似して違和感がない。ただし、第 16 小節の全音符はいかにも場違いであり全音符ではない可能性もある。

(2009 年 8 月 2 日作成、2009 年 8 月 9 日改訂)